

フロンティア

湖国のキーパーソン

三方よし研究会実行委員長 花戸貴司さん



はなと・たかし 1970年、長浜市出身。自治医大卒。滋賀医大、長浜・湖北病院で研修後、永源寺診療所に着任。在宅医療を主に地域医療に力を注ぐ。

対話を繰り返し患者の声を聞く

県内の山間地や農村部で過疎化、高齢化が進む中、地域内の連携、つながりの力で支え合おうとする動きがある。鈴鹿山麓にある小さな永源寺診療所(東近江市)所長の花戸貴司さん(51)は在宅医療に力を入れながら、東近江圏域のNPO法人代表として医療や介護関係者、地域の人々とのネットワークづくりを先駆的に進めてきた。花戸さんは「顔が見える関係を作り、地域の中に入っていくことが大事」と語る。

診療所に赴任して来られた時はどうだったのでしょうか。2000年、ちょうど介護保険が始まる年でした。赴任当初は訪問診療している患者さんは5人ほどでしたが、在宅医療を積極的に進めたいという思いもあり、今は80人近くを在宅で診ています。家でみとるのは年間30〜36人。地域で亡くなる方の約半数にのぼります。

最初は田舎の診療所に来て、たくさん病気を見過ごしてかっこよく治してやろうと意気込んでました。でも現実はいま

た。今でも忘れられない患者さんがおられます。60代の男性、神経難病を患い10年以上家族が介護されていましたが、ご飯が食べられなくなってきました。私は訪問診療で病院と同じように検査や点滴をして一分一秒でも命を延ばそうとしていました。そんな時「先生、もうあかんな」と奥さんに言われたんです。振り返ると、家族や親戚、近所の人が集まりその人をじっと見ておられた。頭をがごととやられた気がしましたね。病気が見えていなかったんです。もつとその人の人生や生活、家族そして地域を見ないといけないと考えが変わりました。

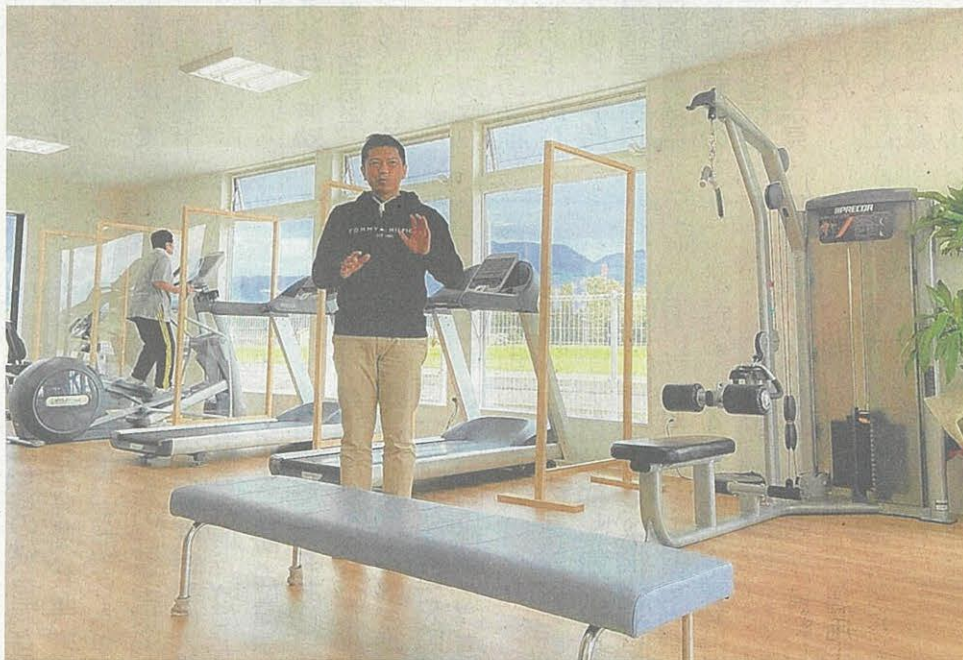
患者さんの生活を知るために、地域の中にもっと出ていこうと思えました。医療的なことばかりでなく、地域のことを知っている身近な医療者を目指したいという思いが、今の活動につながっています。

地域での垣根を越えたネットワーク作りはどのように始まったのでしょうか。患者さんは年をとっても家にいたいという人が多い。そのた

めに行政や介護の人たちと、「チーム永源寺」と名づけた会合を定期的に開きました。ほごなく医療や介護の専門職だけでなく、いろいろな立場の人が集まって情報を交換するようになりました。実際に話し合うと、問題は病気がかりじゃないんですよね。交通手段がない、あるいは孤独や貧困など。だから買い物に行けない人には移動販売を紹介したり、一人暮らしの人には地域のボランティアグループに話し相手になってもらったり、人生の不安を抱えた人にはお寺さんにも関わってもらおう。一つ

一つの事例で輪を広げていくと、専門職だけでなく地域の人や消防、警察などいろいろな人がつながっていききました。『三方よし研究会』のスタートはどうでしたか。三方よし研究会は、永源寺地区を含む東近江圏域で行政と医療、介護の人を中心にした会議が始まりました。脳卒中になった人が入院しリハビリを経て家に帰ってくる、そんな切れ目のない医療・介護連携の仕組みを作りました。その後、専門職だけではなく地域住民も参加され、チームも脳卒中だけでなく、糖

顔見える関係作り 地域の中へ



フィットネススタジオは、運動教室やコミュニケーションの場。「地域の人と活動することで価値が高まる施設になってほしい」と語る(東近江市山上町)

尿病、心臓病、がん、認知症、外国籍の方とのコミュニケーションなども話し合っています。勉強会には毎回100人以上が集まり、車座になって議論しています。昨年4月からはオンライン開催となりましたが、県内だけではなく京都、九州、東京などに輪が広がり、新たなつながりを感じています。

「顔が見える関係は重要ということですね。チーム永源寺も三方よしも互いに顔見知りになると「近所の人が困っているんだけど」と、医療以外の相談を受けても素早く対応ができます。その問題が解決できなくても皆で考えること。例えは認知症の人が歩いていても徘徊と言わず、どこかのおじいさんが散歩しているわ、と見方を変えることができれば問題にもならないですね。医学は進歩し、多くの病気を管理し治せるようになりました。しかし、孤独や貧困、老衰など病気ではない「状態」が地域の中で目立つようになってきていることも事実です。でも、孤独は近所同士で声を掛け、お互いが気掛かりだけで解消できる。貧困も収穫物を分け合うお互いさんの文化を受け入れる

ことができれば、コンビニ弁当よりも温かみを感じる食べ物になる。コロナ禍でも孤立や孤独を地域で支えてきた仕組みが生かされていると感じます。

私は医療というものは高価でたくさん量を提供するよりも、その人にあわせて必要な時に必要なだけ提供することだと思っています。そのためには本人との対話が重要です。病気だけを見て薬を処方するよりも、時間がかかるかもしれないが対話を繰り返すことで本人も満足し、解決できることの方が多いように思っています。

診療所敷地内に幅広い世代が利用できるフィットネススタジオを6月に開設されました。今までも地域にはサロンやおしゃべりの場はあったのですが、参加者はほぼ女性でした。男性や若い人も参加しやすく、地域の情報発信の場になればと思いつきました。でも実は、将来の自分の居場所作りなのかもしれません(笑)。ここで働くのは専門職のスポーツトレーナーや理学療法士を目指す地元のリハビリテーション専門職大の学生です。それ以外にも、20代の引きこもりの子には清掃をお願いしていますが、黙々と見晴らしのいい窓をきれいに磨いてくれています。このように多様な人たちの就労の場にもなっています。(河村亮)

『毎月第4土曜掲載』

三方よし研究会 2007年、東近江圏域(東近江市、近江八幡市、日野町、竜王町)で始まり、医療や介護関係者、ケアマネジャー、薬剤師、救急隊員らが毎月車座で勉強会を開き、具体事例から意見を交わす。全国800人以上とつながる。「患者よし、機関よし、地域よし」の三方よしを目指す。「新しい医療のかたち賞」(医療の質・安全学会主催)受賞など、先進的な取り組みが目まぐるしく行われている。

三方よし研究会 2007年、東近江圏域(東近江市、近江八幡市、日野町、竜王町)で始まり、医療や介護関係者、ケアマネジャー、薬剤師、救急隊員らが毎月車座で勉強会を開き、具体事例から意見を交わす。全国800人以上とつながる。「患者よし、機関よし、地域よし」の三方よしを目指す。「新しい医療のかたち賞」(医療の質・安全学会主催)受賞など、先進的な取り組みが目まぐるしく行われている。